

特集 安里川を歩く

那覇の歴史と共に絶え間なく水が流れ続けている安里川。弁ヶ岳に源を発し、首里から市街地を流れ泊頭から海へ注ぎます。那覇市民なら誰でも一度は眺めたことがあるのではないのでしょうか。那覇市市制が施行されて今年で100年。市内の河川の中でも、当時の姿にもっとも近いのが、この安里川です。今月号では、身近にありながらもなかなか知られていない安里川の魅力をお伝えします。

琉球王国時代における安里川

那覇はかつて「浮島」と呼ばれる離れ島で、海にいくつもの小島が点在する地域でした。当時の安里一帯はほぼ安里川の河口域で、現在のゆいレール牧志駅近くまで内海でした(図「1700年頃の那覇」参照)。

安里川の河口だった泊港は、陸路・水路ともに交通の便が良かったため、13〜14世紀にかけて宮古・八重山・奄美大島などの船が出入りし、にぎわいを見せていました。泊港から入港した小舟は、松川の茶湯崎(ちやなぎさ)橋まで遡ってきたと言われています。



15世紀、琉球王国の尚金福王が、中国からの冊封使(さつぽうし)を迎えるために、長虹堤(約1kmの海中道路)の建設を命じました。当時は浮島だった現在の松山交差点辺りと崇元寺を長虹堤が繋いだことで、首里まで海を渡らずに行くことができるようになり、それが那覇発展の契機となったといわれています。その後、久茂地・前島辺りを埋め立てたことで、現在の那覇の地形が形成されました。

市街地と海をつなぐ

地図を見ても分かるように、安里川は上流からひめゆり橋付近まで、クネクネした形をしています。これは安里川が昔ながらの姿を残していることを意味します。上流域に人々が住宅を建てたことで、大規模な河川改修が行われず、瀬や淵のある、生き物が生息しやすい環境を残しています。首里寒川町付近まで、海からチンやボラ、ガーラなどの魚が上ってきており、市街地にありながらも安里川と海が繋がっていることがよく分かります。

「暴れ川」「ドブ川」と呼ばれた時代

一方で、安里川は流域が狭くカーブが急なため、大雨時にはたびたび氾濫が起きる「暴れ川」でした。そこで、治水対策のため金城ダム(平成12年度完成)と真嘉比遊水地(平成13年度完成)が作られ、安全なまちづくりが図られました。

また、1960年代、1980年代は生活排水などによる水質悪化が大きな問題となっていました。2000年以降の下水道整備や環境意識の高まりにより、水質は環境基準値を満たすまでにりました。



昭和60年8月の洪水被害(松川橋)

身近なところに新たな視点を

安里川の大きな特徴は、川の形に合わせて住宅や建物が建てられたことにより、昔ながらの流れを残していること、市街地にありながらも多様な生物が生息していることにあります。

普段は何気なく眺めている川でも、歴史を知り、水面や周辺の自然などをよく観察すると新たな発見があるかもしれません。あなたがまだ知らない安里川の魅力、歩きながら見つけてみてはいかがでしょうか。



安里川の起点

南風原町新川にある安里川起点の標識。住宅街にひっそりと立っている。



ヒジ川橋(県指定有形文化財)

金城ダム上池にある「ヒジガー川橋及び取付道路」。首里崎山御殿から識名園にいたる途中の安里川上流に架けられた橋。琉球石灰岩を用いた単拱橋(アーチが1つの橋)。17世紀半ばまでには作られたと考えられている。欄干は、切石を利用した質素な作りだが、見えない部分にほぞを作って巧みに組み合わせている。



宝口樋川(市指定文化財)

首里儀保村にある共同井戸で、どんな干ばつでも涸れない樋川といわれた。急な崖の下にあるため、沖縄独特の「あいかた積み」とよばれる石積みで頑丈につくられている。近年は開発が進み一時期よりも水量が落ちたと言われているが、それでも天気によって左右されことなく湧き水がコンコンと流れ続けている。

■「首里あるき」より引用



下之橋(しむぬはし)

首里当蔵町にある昔ながらの面影を残す橋。琉球王国時代、士族や役人たちが住む赤平町や儀保町と、首里城を結んだ。



新井戸(ミーガー)

汀志良次村(現・首里汀良町)の村ガー(共同井戸)。言い伝えによると、防火用水を得るために王府の費用で掘られたもので、10人でも一度に水を汲みだせるよう、大きくつくられたといわれる。見事な石積みや「新」とつくことから、比較的新しい井戸だと考えられる。

■NPO法人首里まちづくり研究会遊覧説明板より引用



金城橋(かなぐしくばし)

琉球王国時代、首里・識名台地の間を流れる安里川に架けられた橋。国王の別邸である識名園に通う際も、この橋が使われた。洪水や沖縄戦で破壊され、今はコンクリート橋が架けられている。